INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ

ニュース
NO.75

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1994年12月5日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL. 03-3821-3737
FAX. 03-3821-6479
発　行　人　住友　義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

第5回アジア・太平洋青年会議 特集号

APYC

テーマ
『ビジョン、そしてその実現を目指して』

□1994年7月22日～8月1日
□マレーシア（ゲンティン、ベナン、クアラルンプール）

第5回アジア・太平洋青年会議（APYC）、マレーシアで開催される。18ヶ国・地域から80余名が参加

日本からも八名が参加

「人生に目的と方向性を見い出し、しっかりとしたビジョンが持てたならば、現在、そして将来も直面するであろう様々な試練にも適切に対応できる力が得られるはずです」。マレーシアのスラルマン教育大臣の基調講演で本年のアジア・太平洋青年会議は始まりました。今回は、開催国マレーシアから多数の青年が参加したのを初め、インド、インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジア、ミャンマー、香港、台湾、韓国、日本、オーストラリア、そしてイギリスの十三ヶ国・地域から八十名余りが参加しました。日本からは今回で三回目の参加となる、小学校で中国帰国者二世のための中国語通訳を務める岩佐長子さん、オーストラリアのMRAスタディーコースを終えて、会議の運営を手伝ってくれた加藤保之さん、若さ溢れる大学生五人組の荒川弘義さん、富田宗伸さん、菊地純さん、新田英明さん、松井繁典さん、そしてMRA事務局から一名と、計八名が参加しました。プログラムは今回も多岐にわたりました。

家族関係を一緒に考える

〝心の開発〟を目指すセミナーでは、自分自身の在り方や家族や社会との関わり方等についての考え方が示唆され、朝の体操の後、それぞれが自分の生き方を省みる時間を持ちました。グループディスカッションでは、家族の関係などの話題も話し合われました。

フィリピンからの参加者は、「自分の家族はいつも一緒で仲良く暮らしていましたが、数年前、警察官だった父が遠隔地に転勤になってしまいました。自分はその事実を受け入れることができずずっと腹を立てていました。昨年の自分の誕生日のパーティーに父親がわざわざかけつけて

くれた時も、お礼の言葉も言わず、父のために用意しておいたプレゼントもとうとう渡しませんでした。ところが今年、父が突然心臓マヒで亡くなってしまったのです。お礼の言葉も言わなかった自分が本当に悔やまれました。やるべきと思ったことは、決して明日に延ばしてはいけないと学びました」と涙ながらに語ると、カンボジアからの参加者は、「自分の家族はポルポト時代に一人の兄を除いて全員殺されました。兄は私にだけは教育を受けさせようと日夜一所懸命に働いてくれました。しかし、そのことが兄の結婚を遅らせているということが、私の心に重くのしかかっていました。私さえいなければと、兄を愛するがために私は家出をして、結局、タイの難民キャンプに入りました。心配した兄は八方手を尽くして私を探したものの、ついに見つけることができず、寂しくなって結婚したと人伝えに聞きました。私たちはお互いに愛していたがゆえに別れなければならなかったのです」と語りました。

●全体会議でも個人の体験が率直に語られた（発言者はマレーシアの女性）

●アジア・太平洋地域の多様性を示す顔が並ぶ

兄弟姉妹のように仲良くなっていった参加者たち

十日間という短い時間でしたが、初めて会った者同士でもこのように深い話ができたので、皆兄弟姉妹のように仲良くなれたのでしょう。また、タイに亡命しているミャンマーからの参加者は、既に六年間も家族の消息を聞いていないとのことで、いつも当たり前のように思っている家族の存在一つとっても、それがいかに有り難いことなのかということに改めて気付かされました。

マラヤ大学のベーカー教授よりの、『共通する分母―人間としての価値』というお話を初め、マレーシア各界で活躍する人々より、『宗教間交流と地域社会』、『ビジョン・使命・変革』、『ボランティア精神と奉仕について』といった様々なテーマで示唆に富んだ話を聞くことができました。又、恒例の〝文化の夕べ〟では、各国からそれぞれ趣向の凝らされた演物もあり、アジア・太平洋地域の多様な文化を改めて確認できました。

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　6、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　3、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌―MAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円（寄付扱い・年額）を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

スポーツ・青年大臣も感激した参加者たちの決心

ゲンティン高原での五日間の会議を終えて首都クアラルンプールでガニア・スポーツ・青年大臣夫妻を迎えて閉会式が開催されました。会議の間に習った歌が披露されたのに続いて、十人程の各国の青年が会議の間に決心したことを発表しました。カナダ育ちのフィリピン人参加者は、「私はカナダで中学まで過ごしましたが、故国についても学ぶようにと高校からはフィリピンで暮らしています。しかし、タガログ語も良くできないし、いつも一日も早くカナダに帰りたいと思いながら毎日を過ごしていました。この会議に行くように勧められた時も、フィリピンにいるよりはましと思って来たのです。しかし、自国紹介のプログラムでフィリピンの紹介をしなくてはならず、生まれて初めてフィリピンの踊りを練習し、タガログ語の歌を歌ったのです。会議に参加した皆が、自分の国を愛しているように、私も初めて自分の母国―フィリピンを愛し始めましたし、これからはもっと自国について学んでいくつもりです」と語りました。又、丁度、留学先のエジプトから帰国していてこの会議に出席できたマレーシア人参加者は、「九年前、学校の担任の先生の指示で、級友たちに本を貸し出しました。一年後、回収した時、何冊か足らなかったのですが、先生がそれに気付かなかったことをいいことに、そのままになっていました。この会議に参加しているうちに、そのことを思い出しました。エジプトに戻る前にその学校の校長先生を訪ねて謝るつもりです」と述べた。又、韓国人参加者は、「この会議に参加する前、私はいつも物事を否定的に捉えがちでしたが、それが変わりました。以前仲が良かったグループが分裂してしまった時、彼らを仲直りさせる勇気がありませんでした。帰国したら、その友人たちに謝る決心をしました」と述べた。青年たちの決心を聞き終えたガニア大臣は、大変感激した旨をその講演の中で繰り返し述べました。

●ガニア・スポーツ・青年大臣から参加証が各国代表に手渡された

多彩なプログラム

会議の他にも、マレーシア戦略問題研究所を訪ねて、マレーシアの二千二十年に向けてのプロジェクトプランについての説明を受けたり、マレーシアの特産品であるバティックやピューター（錫製品）の工場を見学しました。又、北部の有名なリゾート地であるペナンに向かう途中には、錫の鉱山で名を成したイポー市の市長を表敬訪問した他、ペナンでもソニーの工場見学を初め、ペナンのMRA関係者との交流、海水浴など多彩なプログラムが設けられました。八月一日から三日まではクアランプールでのホームステイプログラムもあり、マレーシアの人々の日常の暮らし振りを理解する機会も与えられました。

（終）

●マレーシア戦略問題研究所でも活発な質疑応答がなされた

尊敬し合えることの素晴らしさ

筑波大学４年
富田　宗伸

国境が無くなったように感じた出会い

「将軍」、「タコ焼き」、「すし」、「おしん」、「すき焼き」、「ちあき」、「あかんたれ」。実はこれらは皆、ＡＰＹＣ（アジア・太平洋青年会議）で知り合ったマレーシア人の友達のあだ名です。ＡＰＹＣ初日の昼食の時間、自己紹介を終えた時にはもうその名で呼び合っていました。彼等、彼女等も大学生で、本当によく気が合ったし楽しかったので、食事が終わる頃には、もう自分たちのあいだには国境が無くなったのではと思える程でした。とにかく初日から彼等とはこの調子だったので、夜皆で集まって話したり、クアラルンプールの街を一緒に歩いたり、そんなことをしている内に、日本人大学生五人組と彼等とはすっかりベストフレンドになれたのでした。ちなみに、僕がもらったマレーシアンネームは「マッサントー」で、意味を聞いても教えてくれず、どんな俳優なんだと聞くと笑っていたところを見ると、芸人かなんかの名前をつけられてしまったようです。

ＡＰＹＣも半ばのある日、「ちあき」ことニサから、「ＡＰＹＣが終わったら私の家へホームステイしに来て。クアラルンプールを案内してあげるから」と言われました。イスラムの家庭だということと、女の子からそんなことを言ってきたということで、一瞬戸惑いましたが、結局日本人でお世話になることになりました。実際、彼女の家に行ってみると、思っていたよりオープンというかモダンな家庭でした。僅か二日間のホームステイでしたが、昼間はニサや他の大学生の皆で街中を案内してくれたり、夜は夜で、ＡＰＹＣの参加者と親戚を集めてホームパーティを開いてくれたり、とにかく楽しみ上手な家族に囲まれて、マレーシアの家庭での滞在を満喫させてもらいました。今度は是非僕たちがニサたちのホスト役を務めたいと思っています。

●富田君が親しくなったカンボジア代表たちの歌と踊り

尊敬の念を抱いた真剣な生き方

そんな楽しい時間があった一方で、とても考えさせられることもありました。カンボジアやミャンマーの人たちから彼らの国で何が起きていたのかを聞いた時のことです。とてもここに書くことはできませんが、大きなショックを受けました。そして、それらのことを知っているつもりで知らなかった自分、それをどこか遠いところの問題のように感じていた自分、甘い世

●ドラマワークショップで創作された寸劇を演じる富田君（中央）

界にひたっていた自分を反省させられました。そして、命を賭ける位に真剣で真面目な彼らの生き方に尊敬の念さえ抱きました。また、フィリピンの参加者は、「ある日突然、政変のために、それまでの幸せだった家庭が一瞬にして財産を失い、学校もやめて働かなければならない苦しい生活が始まった。その不幸を招いた政府を憎むことしか頭の中になかったことがさらに不幸を呼んだ。その間違いに気付きそれを正した時に自分が生まれ変わって幸せな生活に戻ることができ[illegible]と話しました。人生、生きていて何が悲しいかというと、自由を奪われること、人がむやみに殺されていくのをこの目で見ること、誰かを憎まなければならないこと、それほどに悲しいことはないのではないかと感じました。そして、それを防ぐために自分も何かしたいという気持ちを持ちました。

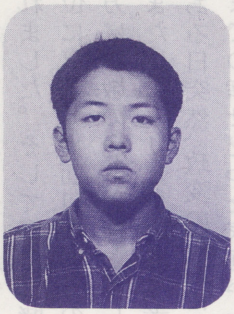
●フィリピン人に早替わり、習いたてのフィリピンの歌を早速披露する富田君

●多様な民族・文化を有する自国を歌と踊りで紹介するマレーシアの参加者達

尊敬し合えることの素晴らしさ

ある日の夜のことです。その日は特に仲が良くなったインド系マレーシア人の[illegible]とカナダ在住のフィリピン人のチェリース、そして中国系マレーシア人のフィリップの四人で話していました。最初はいつものように楽しい話題で盛り上がっていたのですが、急にハジがそれぞれの家族の問題について話し合おうと言い出したので、百八十度転換してシリアスな話題になりました。僕の番が回ってきて、「自分は中学から両親とほとんど一緒には暮らしていないので、両親が自分を愛しているのかいないのかさえ時々不安になる。一年に一回位とてつもなく孤独を感じるときもある」。そのようなことを話したら、ハジがペナン州の今年のスポーツマン・オブ・ジスイヤーのくせに目をうるませながら僕の話を聞いてくれました。そのハジの気持ちをどんなにかうれしく感じたことか。その晩の四人はとりわけ元気のいい仲間ばかりだったけれど、それぞれの持っているバックグランドが多様なだけあって、実はその普段の明るさからは想像もできない悩みを抱えていました。そして、お互いの心の痛みを分かちあったことで、自分たちの関係が一層深く密になった気がしました。このような深い話ができたのもMRAならではの雰囲気があったからだと思います。

このAPYCに参加すると決まった時に、日本は批判されるのではないだろうか、日本人は孤立してしまうのではないだろうかという不安がありました。でも、それも杞憂でした。本当に沢山の友だちが仲良くしてくれました。それというのも、彼らが僕たちのことを日本人としてよりも、個人（国やその過去とは関係ないという意味）として付き合ってくれたからです。今ではそのことにとても感謝しています。そして個人というものの持つ意味の大きさも感じました。ですからこれからは一個人としての自分に責任を持つように心掛けていこうと思います。APYCでは尊敬し合えることの素晴らしさを知りました。それぞれの人格や生き方を、互いに尊敬し合える関係を友達との間にも築き上げていきたいものです。（終）



数多くの体験

アジアに向けて目が開かれた

日本大学1年
菊池　純

数多くの不安を抱いての初めての海外旅行

参加費用が安い、僕は最初、そんな軽い気持ちでこのAPYC（アジア太平洋青年会議）への参加を申し込みました。この夏休みに海外に行ってみたいという気持ちがあったので、これはいい機会だと思ったからです。ところが、このMRAという団体のことを全く知らないということに気付きました。その後、これまでのMRAの活動などを説明してもらったり、スライドなどを見せてもらって徐々に分かってきました。

そして出発の日、僕の心の中では、初めての海外旅行、色々な国々の人々との出会い、そして英語力の不足等々、数多くの不安が、最初の軽い気持ちとは全く逆の重くとても大きな存在となっていました。

今まで体験したことのない喜び

そんな気持ちでマレーシアに到着しましたが、そこで待っていたのは、僕の数々の不安を吹き飛ばす人々の心の広さ、温かさでした。

他の国々の人たちに自己紹介する時は、予想通り緊張して、「自分の英語がどこまで通用するのだろうか、それどころか全く理解してもらえないんじゃないだろうか、相手の言っていることが理解できるだろうか」など様々なことを考えていました。片言の[illegible]語を身振り手振りを交えて補いながら何とか話をしているうちに、僕はあることに気が付きました。それは、自分に英語力がないことに相手が気付くと、その人は理解できるまでじっと聞いてくれるのです。会話というものは一回きりのものではなく、お互いが理解し合うまで何度繰り返してもいいのだということが分かりました。日本にいて今まで様々な人たちと会話をしてきましたが、お互い理解できなかったということはなかったので、初めは戸惑い、苦労しましたが、理解し合えた時の喜びというものは、今まで体験したことのない、僕にとっては貴重なものになりました。

国を良くするも悪くするのも一人ひとりの変化

そのように理解し合っていく中で、色々な話をするようになりました。ゲンティン・ビュー・リゾートで同室だったカンボジア人参加者は、僕が一番ショックを受けた印象的な話をしてくれました。その時部屋には僕と他の日本人が三人いましたが、僕たちの言葉が出[illegible]、という

●文化の夕べでテッコンドーや仮面踊りを披露する韓国代表

●菊地君も加わった歌のワークショップ、練習の成果を披露する

か出してはいけないという雰囲気でした。それだけ真剣になって話していました。その話というのは、カンボジアの国内状況は以前とあまり変わっていないというものでした。僕は日本の自衛隊を初め、色々な国々が人員を派遣し、また選挙も行なわれ、当然カンボジアは以前より良くなっているものと思っていました。しかしその人はカンボジアは変わっていないと言うのです。また、子供の頃ジャングルで暮らし、人を殺したこともあると話してくれました。その人が今どれだけ危険な状態にあるのかはよく分かりませんが、家族さえも信じられない、いつ密告されるか分からないと言うのです。僕の英語力ではその位しか分かりませんでしたが、カンボジアの今の状態が充分伝わってきました。この会議のテーマの一つに「変化」というものがありましたが、まさにカンボジアの人々はこの「変化」が必要な時であり、国を良くするのも悪くするのも一人ひとりの変化によると思いました。そしてそれは日本にも言えることです。

自分のえをしっかり持っている参加者たち

その他にも色々な体験を色々な人たちが話してくれました。グループディスカッションの時などは、涙を流して自分の辛い体験を話す人もいました。複雑な国の事情、家族の不幸などの苦い体験を持っている人たちですが、僕に見せる表情は決して暗くなく、むしろ明るく温かかったことを覚えています。この会議で笑顔が絶えなかったことはありませんでした。もし僕がこんなに辛い体験をしていたらこんなに明るく振る舞えるだろうかと何度も思いました。

もちろん僕と同じような立場の人たちも大勢いましたし、彼らとも大変親しくなりましたが、大きな違いにも気付きました。それは自分の考えをしっかり持っていることです。特に未来に対する姿勢が違っていました。僕は、将来何になるかなんて具体的に考えたことはないし、何とかなるだろうという甘い気持ちでいました。しかし、彼らは、自分の将来についてビジョンを持ち、自分だけでなく、国のこと、世界のことまで考えていました。そしてその中で自分がするべきこと、自分にふさわしいことをしっかり見つめていました。そこで僕は自分がいかに幼稚であったかが分かりました。

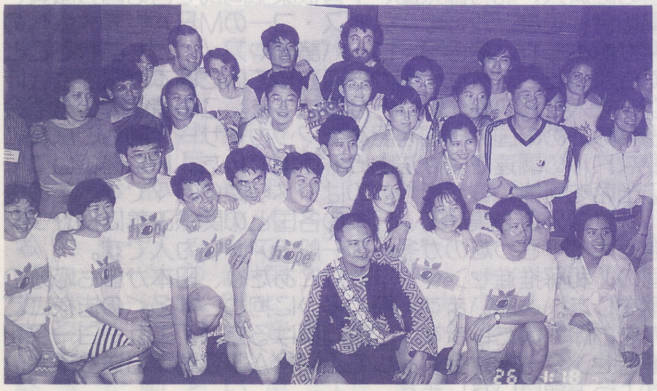
アジアに向けて目が開かれた

この青年キャンプの十日間、色々なことを得ることができ、数々の体験をしました。そして帰国してからアジア諸国に興味を持つようになりました。今まで僕の目は、アメリカやヨーロッパを向いていましたが、最近では、村山首相のアジア四ケ国訪問や北朝鮮の問題など色々なことに注目するようになりました。

僅か十日間でしたが、楽しい、そして貴重な体験をしました。戸惑ったり、悩んだりと苦労もありました。これらの体験を生かすも殺す自分次第だと思っています。

（終）

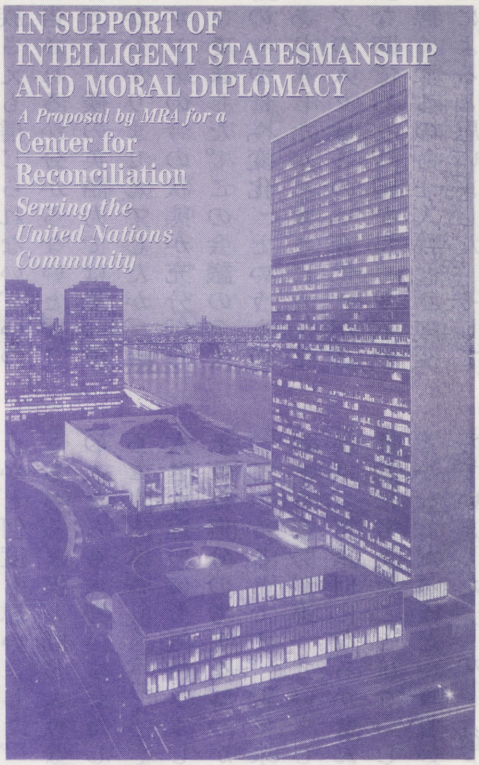
●楽しい歌声は夜遅くまで響いた（右から3人目は日本の岩佐さん）



●すっかり仲良くなった参加者たち（前列中央は台湾の山岳少数民族の代表）

国連支援活動強化のための

『和解推進センター』ニューヨークに誕生！



●聡明なステーツマンシップと道義外交の支援を目指して

冷戦後の地域紛争が増大する中で、紛争解決に果たす国連の役割が増大しています。ブトロス・ガリ事務総長は「国連のルネッサンスこそが最大の希望である」と述べていますが、益々国連にのしかかる負担を分担し合う必要があります。アメリカの元外交官で「第二トラック外交（公式チャンネルに対する民間外交）」の推進者であるジョー・モントヴィル氏は、「国連による予防外交戦略は、経験と知識に富んだNGO（非政府組織）のみが担うことができる精神的、心理的活動を必要としている」と述べています。
1992年スイス・コーのMRA世界大会において、アメリカのハロルド・ソーンダース元国務次官は、「許し合いが起こり、傷が癒され、お互いの不満が表現できる。コーのような場で得られる洞察を、いかに現実政治に活かして、人を変えていけるかが、今日最大の課題である」と訴えました。
MRAは、こうした呼びかけに応えて、国連NGOとしての国連支援活動の強化をはかるために、ニューヨークに「和解推進センター」を年内に設立することになりました。
このセンターは、次のような目的に使われます。

1　外交官や国連関係者が、世界的な問題についての洞察や知恵が得られるようなオアシスとして
2　対立する当事者同士が、相互理解と和解を求めて非公式な対話を行う中立的場として
3　和解プロセスの経験や技術に富むMRAの世界的ネットワークへの接点として

●国連ビルから３分の至近距離に

国連ビルから徒歩３分のダグ・ハマーショルド（国連第２代事務総長）・タワーの中に購入されたこのセンターは、４つのベッドルームを備え、階上のレセプション・ルーム、表側のオフィス、そして従来の賃貸マンションと併せて多目的な活動に対応できることになります。上記の目的に添ってセミナーの開催、ビデオの上映、会食、インフォーマルな話会い等が可能になります。

●日本からも望まれる貢献

このプロジェクトには、総額３億円の予算が組まれていますが、これまでにその約３分の２が各国からの寄付で集まりました。この中には家族の遺産、旅行や家の増改築の貯え、バザー収入などから寄せられた浄財の他、発展途上国からの寄付も少なくありません。これは、これまでのアメリカからの貢献に対する感謝や国連活動に対する期待も込められているからです。
戦後まもない1950年、広島・長崎の両市長、石坂泰三東芝社長を含む経済人、北村徳太郎、中曾根康弘両氏を含む国会議員、労働組合代表など72名が、スイス・コーのMRA世界大会への出席が認められ、他のヨーロッパ諸国やアメリカも訪れることができました。これは世界から孤立していた日本が国際社会に再び迎え入れられる先駆けとなりました。この時民間の国際会議出席のための国外出国を認めたマッカーサー元帥も、旅費に必要なドルの調達だけは法的に不可能でした。ドルを集めて一行の出席を可能にしてくれたのはアメリカの方々です。その後も、必要な外貨を集めて、日本の各国との関係改善に役立つ交流を支えて下さったのが多くの一般のアメリカ人です。
今回の「和解推進センター」設立にあたり、日本からも応分の貢献をしたいと思います。額の多少に拘わらず多くの皆様にご協力をお願いいたします。ご賛同頂ける方は「ニューヨーク和解推進センター寄付金」として、MRA事務局宛お送り下さいますようお願いいたします。

事務局通信

●去る11月12日に台湾で、「良知教育とアジアの将来」というテーマで国際会議が開催されました。〝良知〟とは儒教の教えの中にある、「事の善悪を知らしめる心の中に備わった働き」というものだそうです。その良知を幼児の頃から自覚させるという教育を施すことを通して、健全な社会、ひいては平和な世界作りに結びつけようという試みを続ける劉博士（台湾のMRA運動のパイオニアの一人）の呼び掛けで開かれたこの会議には、孫元行政院院長（首相）を初め教育関係者等120名が参加し、日本からも弊協会の住友会長夫妻等８名が参加しました。

●MRAニューアルバム完成のお知らせ
構想三年、その完成が待たれていたMRAの新アルバム「Learning to Live Again」（デービッド・ミルズ＆アリステア・マイルズ作詞・作曲・歌）が完成し、CD（2,500円）とカセット（1,800円）で発売されました。入手ご希望の方は事務局へご連絡下さい。